

第40回国際幼児教育学会ハワイ大会 2019年令和元年8月8日9日

大会テーマ…Culture in Early Childhood:Putting it into Practice…

絵本部会ワークショップ 予告

## 『はらぺこあおむし』と自己発見

…日本での『はらぺこあおむし』・『はらぺこあおむし』の絵本であそぼう…

エリック・カールが1969年に出版した『はらぺこあおむし』は爾来50年の間に、65言語に翻訳され、さまざまな文化のなかで成長する子どもたちに支持され共有されてきました。日本でも大人気で一番よく知られている翻訳絵本です。それには原作の持つ魅力はもちろんですが、もりひさしの翻訳によるところが大きいと考えられます。文化の架け橋となる〈翻訳〉に新たに焦点を当て意見交換を試みます。

カールの諸作品には「自分を発見する」という普遍的なテーマが通底しています。『はらぺこあおむし』もその一つではないでしょうか。

葉っぱに産み付けられた卵が孵り、自分に合った食べ物を求めて彷徨する。冒険にしくじり、お腹を痛めたあおむしは、葉っぱに再度行きつく。その自分に合った居場所で大きく育ち、蛹を経て蝶に脱皮して明日に向かい飛び立っていく。

この小さな虫の成長の旅を、歌人もりひさしはどのように日本語に表現し伝えようとしたのでしょうか。

多様な言語に訳されたこの絵本からは、アートワーク、歌やダンス、あおむしの飼育、食べたもの追体験、数あそび、劇あそび、母語以外の言語で楽しんだり等々、いろいろな活動が生まれてきました。絵本の限られた紙面は実は無限の広がりを含んでいる、このことが実感できる絵本作品と言えるでしょう。

絵本から触発された読み手の大人との対話、聞き手同士の文化共有は、認知能力のみならず非認知能力を育む豊かな土壌を醸成してきています。しかし、情報過多に陥りやすいグローバル社会では、原著の思いと離れた方向に流れている商品化や紹介には、〈広がり〉の質のチェックが欠かせないのではないのでしょうか。

このワークショップでは、アゲハ蝶になってからの未来を想像し、どんなところに飛んでいくかを六角形の折り紙を舞台に見立てて、アゲハの身になった参加者のみなさまが希望する飛翔場面をそれぞれ2つ描いて、かつ動かす遊びを楽しもうと計画を練っています。

ご参加をお待ちしています。

開催地ハワイ大学ヒロ校での担当：山田千明・松本由美・上田智子・宮地敏子